

き
み
は
誰
か
の
大
切
な
ひ
と

目次

一	スイングバイ	4
二	願いごと	14
三	ジョバンニ	50
四	ふたりの幸せ	60
五	家族	70
六	花火大会	96
七	アンタレス	118
八	祈り	126

表紙絵
橘邦衛
様

きみは誰かの大切なひと

第一章 スイングバイ

見上げた夜空は広大で、それは私たちの未来そのもののようには思えた。

まだ太陽系の惑星が、水金地火木土天海冥と言われていたころだ。私たちの体は今よりずっと小さくて、未来は遠い先の話だと信じていた。

虫音騒がしい、夏の夜。小高い丘の上にある小学校のグラウンドに忍び込んだ私たちは、満天の星空の下で、トランシーバーを片手に宇宙との交信を試みていた。

「こちら、地球。こちら、地球。ニューホライズンズ、応答願います」

「こちら、惑星探査機ニューホライズンズ。間もなく木星をスイングバイ。これより、冥王星に向かいます」

あそこ、惑星探査機ニューホライズンズが、冥王星を目指して宇宙を突き進んでいた。水星、金星、地球、火星、木星、土星、天王星、海王星、

冥王星。冥王星が、まだ準惑星ではなく、太陽系の最果てにある惑星とされていた時代だ。未知の惑星への探査。太陽からどんどん離れていくニューホライズンズの姿に、子どもながらに孤独と寂しさを感じていた。

「がんばれ！」

私は、トランシーバーの向こう側に呼びかける。

私たちは、孤独な旅路に向かう惑星探査機を応援した。使い古されたトランシーバーで。この電波が、冷たい宇宙を飛ぶニューホライズンに届くようにと願いながら、何度も交信を試みた。

私たちのちっぽけな声は、宇宙まで届くことはなかっただろう。だが、私たちの心の中で、確かにそれは届いていた。

たくさんの夢を乗せて。

いつか、自分たちも、無限の旅路に着くと信じて。

あれから、何年たったのか。

地元から離れて、私は都会の大学に通っている。

この数年の間に、私たちの夢を乗せたニューホライズンズは、ついに冥王星の観測に成功していた。ニューホライズンズが観測した冥王星の写真が、当たり前のように夕方のニュースで報道される。遠い未来の話だと思っていたのに、未来は意外とそう遠くないところまで来ていたようだ。

一方で、私は普通の大人になっていた。高校受験、入試、大学生活。ただひたすら平凡に、地味に、地道に生きてきた。ニューホライズンズのような冒険も、特筆すべき功績もない。

昔の自分が見たら、こんな人生はつまらないと思っただろうか。でも、高校受験も、入試も、平均的な人生の岐路にそそり立つ壁は険しいものばかり。大人になって普通が一番難しいのだと知ったから、これがたぶん正解だ。と、何度も自分に言い聞かせてきた。

私の人生は、比較的なだらかな山と谷でできた順調な道のりだった。このまま流れに身を任せていけば、どうにかなる。そう思っていたのに、私の人生はここで大きく軌道を逸れる。

——スイングバイ。

誰が、想像しただろう。

突然、ア・パートを追い出される日が来るなんて。

「はあ」

今夜の風は、とても心地いい。あの日と同じ夏の夜空を見上げながら、とあるア・パートのドアの前で、地べたに座り込んでいた。傍らには、ア・パートからかうじて持ち出した最低限の荷物がある。でも、その大袋はとても小さくて、私の今までの人生そのものみたいに見えた。

カコン、カコン、カコン。風雨にさらされて錆びた金属製の階段を、誰かが上ってくる音がする。その響きに耳をそば立てて、私は音の鳴る方向に目を凝らす。

暗闇の中、階段の影からぬうつと顔を出した。外廊下の蛍光灯に照らされて、大きな体が現れる。目を見張るような美しい赤毛に、彼の性格そのものを表すような太めの黒縁メガネ。とげとげしいピアスが爛々と銀色に光る両耳。

懐かしい幼なじみの姿に、私は笑顔で声をかけ

た。

「久しぶりだね。やごちゃん！」

「お前……」

「元氣してた？」

返ってきた声は、想像していたより低く、落ちていた男性のものだった。

彼の名前は、蜻蛉切と言う。幼なじみで、昔はよく宇宙との交信ごっこをして遊んでいた。あときはまだ背丈も小さくてかわいかったから、やごちゃんと呼んでいたけれど、その面影はほとんどない。

歳を重ねた彼は、立派な男になっていた。その背丈は、二メートルに近い。大きな体は随分と鍛えられていて、コンクリートの壁みたいだ。当時、柔らかかったほっぺたも、丸みを帯びたかわいい体も、どこに行ってしまったのか。

骨の太くなった手には、チューハイの入ったコンビニ袋が握られていた。

私は、のっそりと地べたから立ち上がる。

「コンクリートは冷たいね」

「いつから、ここにいたんだ」

「一時間前からかな」

「不用心だぞ」

「だって、やごちゃんの連絡先は知らなかったし」
私たちは、同じ大学に通っている。親同士の仲が良かったから、今でも交流する機会は多い。だが、思春期を経て、私たちの関係は少しばかり変化していた。

お互い同じ大学に通っていると言うだけで、ラインもメールアドレスも知らない。知っているのは、年賀状の送り先の住所だけだ。

私は、大学四年生。蜻蛉切は、まだ大学二年生。大人になるにつれて、その歳の差をあらゆる場所で感じるようになった。たとえ同じサークルに所属していても変わらない。それが、お互いの心に気まずさと呼んで、なんとなく疎遠になっていたのだ。

サークルの送別会から、四カ月。久しぶりに顔を見て、安心した。

やっぱり、やごちゃんはやごちゃんだ。

「その名前で呼ぶのは、やめろ」

「どうして。やごちゃんは、やごちゃんじゃない」

「それは昔のあだ名だろう」

「固いなあ。やごちゃんは」

そう言うのと、あからさまにムスツとしたので、私は改めて言い直した。

「はいはい、蜻蛉切ね。これでいいでしょう？」

「で、こんな夜遅くに何の用だ」

私との雑談よりも、さっさと用件を聞きたいらしい。

かわいげがないなあ、と思いながら、私は正直に話した。

「アパートを追い出されたの」

「は？」

「住むところがなくてさ」

「それで自分を頼りに？」

「そういうこと。だから、今夜泊めてもらえないかな」

「ならん」

「そこを、なんとか」

「ならん」

蜻蛉切は間髪入れずに拒否して、鍵をドアの鍵穴に差し込んだ。カチャリと音がして、ドアが開く。

このままでは、本気で追い返されてしまう。そう思った私は、咄嗟に蜻蛉切の腕を掴んだ。

「この手は、何だ」

「お願い、他に行くところがないの！」

「女友達に頼ったらどうなんだ」

「みんな就活中で留守なんだよ！」

大学四年生にもなれば、みんな就活で忙しい。人生が決まる大切な時期だ。そんな時期に、大学周辺をうろろしているのは私くらいなものだった。

蜻蛉切は、体を一回り膨らませて、大きくため息をつく。

「ホテルは」

「え」

「ホテルが、あるだろう。駅前に、いくらでも」

「やだよ。あそこ、ラブホしかないじゃん」

駅前は、ラブホ街だ。呼び込みのお兄さんや、酔っ払いも多い。深夜に女性が出歩いていいような場所ではない。それは蜻蛉切も、よく知っているはずだ。

私は両手を合わせて、蜻蛉切に頭を下げる。

「お願いします！ 床でいいから、寝させてください！」

「……お前、俺を何だと思ってるんだ」

「仲のいい幼なじみ？」

「はあ……」

蜻蛉切が、うなだれる。その瞬間、蜻蛉切の目の先が、自然と私の足元に向けた。コンクリートの上にあった両足の違和感に、蜻蛉切は大きく目を見開いた。

「……靴は、どうしたんだ」

「へ？ 靴？」

私も、視線を落とす。靴がない。そもそも靴を履いて出てきたと言う記憶がない。打ち上げられた魚の腹のような、生白い足がコンクリートの上に並んでいる。どうやら履き忘れていたらしい。

私がそう答えると、蜻蛉切はますます頭を抱えて、眉間にしわを寄せた。

「……お前は、いい歳して、何をしてるんだ」

「ごもっともです」

私はへらへらと笑う。能天気な性格は、生まれつきの性分だ。

蜻蛉切は敢えて言及せず、ただ淡々と言葉を口にした。

「入れ」

「え」

突拍子もないタイミングだったので、聞き間違いかと首をかしげた。

「入るか、入らないのか」

「入ります！ 蜻蛉切、ありがとう！」

「声が、大きい……」

私は、慌ただしく部屋の中に入った。

助かった。

これで、野宿は免れそうだ。

蜻蛉切の部屋は、八帖の洋室だった。玄関入ってすぐのところにキッチンがあり、冷蔵庫や、ド

ラム式の洗濯機があった。風呂とトイレは別らしく、とても広い造りになっている。

室内はきちんと片づけられていて、すっきりしていた。大きなベッドに、テーブルと椅子。薄型テレビと、向かい合うように置かれたソファ。散らからないように、生活感の中に、ある一定のルールが設けられていた。

しかし、そんなことはお構いなしだ。私は裸足のまま、ずかずかとリビングに入り込み、荷物をソファの横に置いた。

私はバサッと、勢いよくソファに飛び込む。

「じゃあ、私はここ！」

「勝手に決めるな」

後を追って部屋に入ってきた蜻蛉切が、コンビニ袋をテーブルに置く。幼なじみの自由奔放な行動に対して、文句を一応は口にするが、蜻蛉切はすでに諦めていた。

そんな蜻蛉切を横目に、ソファの上で寝返りを打つ。ふかふかしていて気持ちいい。狭いけれど、これなら問題なく寝られそうだ。

蜻蛉切が、ソファの上から私を覗き込む。

「おい……」

「ねえ、ご飯食べた？ 私、食べてないんだよね。

今、食べてもいい？」

「それは、かわらないが……」

「やったー」

「相変わらず、落ち着きのない奴だな……」

荷物の中から、コンビニで買ったコッペパンを取り出す。蜻蛉切も隣に腰かけ、手に持っていたコンビニ袋を広げた。アルコール度数が強いチューハイが二缶。わかめのおにぎりが一つ。

「蜻蛉切って、意外と小食なんだね」

「寝る前の夜食だ。夕食は、外で済ませた」

「そういうことかあ」

私はコッペパンにかぶりつく。イチゴジャムが甘酸っぱくて美味しい。

「お前こそ、少なすぎないか」

「いつも、こんなもんだけど」

「これも、食うか？」

見かねた蜻蛉切が、わかめのおにぎりを差し出

す。大きな手のひらにちよこんと乗ったおにぎり
は、とてもかわいらしく見えた。

「それ食べたら、蜻蛉切の夜食がなくなるよ」

「俺は、酒を飲むからいい」

「すきっ腹に酒だけ入れると、酔いやすいよ？」

「心配は無用だ」

そう言いながら、蜻蛉切はフンと自信ありげ
に笑った。

大学に入ったばかりのころ、未成年だった彼は
もうすっかり成人していた。酒だって、難なく飲
める。しかも、強めの酒を。

幼なじみの知らない一面を垣間見て、私は唇を
尖がらせる。

「蜻蛉切って、年下なのに私よりちゃんとしてる
……」

「そうか？」

「それに比べて私は……」

先の一件を思い返して、ガクリと肩を落とす。
大学四年生にしてアパートを追い出され、行く当
てもなくさまよった挙句、年下の幼なじみを頼る

なんて。

「酒でも飲まなきゃ、やってられないよ」

私は苦い感情を、ため息とともに吐き捨てる。

幼なじみの普段とは違う態度を、蜻蛉切は密か
に気にかけていた。

「事情を、聞いていいか？」

「言わない」

「おい」

「言ったところで、どうしようもない」

「わからないだろう」

「いいの。これは、私の問題だから」

私は、そう言っただけで突っぱねる。

蜻蛉切の気遣いは、とてもありがたい。だが、
それと同時に、幼なじみに泣きつく自分が情けな
かった。かつて姉様と呼ばれて、実の姉のように
慕われていた自分だ。仮にも年上としてのなけ
しのプライドがある。

「ねえ、蜻蛉切。おにぎりより、そっち頂戴」

私は話を逸らすべく、彼の手に握られたチュ
ーハイを指さした。蜻蛉切は嫌な顔一つせず、チュ

ーハイを渡す。

「強いから、気をつけろよ」

「はいはい」

カシユツと音を立てて、チューハイを開ける。普段、私は好んで酒を飲まない。でも、今夜ばかりは酒の力を借りたかった。

人生で一番、ろくでもない夜だ。

そんな夜に、私を拾ってくれた蜻蛉切の存在は、唯一の助け船だった。いてくれて、本当によかったと感謝している。彼がいなければ、今ごろ私はどうしていただろう。裸足で、真夜中の町をさまよっていたのだろうか。

わずかに気化したアルコール分が、私の鼻腔に入り込む。やけ酒も、相手がいなければ空しいだけ。

やるせない夜に、信じられる人がそばにいてくれるってことは、それだけ幸せなのだった。

カチン。

私は、蜻蛉切の手に握られたチューハイの缶に、側面を軽く当てる。

そうして、私は笑顔で言った。

「スイングバイに、乾杯」

「すいんぐばい？」

「そう。スイングバイ。私の人生、大きく軌道を変えて、これから旅に出るの」

チューハイを、ごくごく飲む。乾いた喉に、よく冷えたアルコールが沁みる。パア、と一息つけば、体がぼつと温かくなった。気持ちがいい。このまま嫌なことをすべて、忘れてしまえばいいのに。

しかし、乾杯をしたはずの蜻蛉切の手は、完全に止まっていた。

「お前……」

「ん？ どうしたの？」

「いや……」

蜻蛉切は言いよどみ、私から目をそらす。

私は気にも留めず、酒を胃に流し込む。

せっかく、幼なじみと過ごしているんだ。この時間を、楽しみたい。私は蜻蛉切に微笑みかけ、もう一度乾杯をした。



女を殴る男を、どう思う。

俺は、最低だと思う。

「久しぶりだね。やごちゃん！」

高校卒業後。蜻蛉切が、久しぶりに顔を合わせた幼なじみは、同じ学部の上の先輩で、知らない男の彼女になっていた。

「……」

高校のときより、化粧をして華やかになった彼女は、蜻蛉切の目には無理をしているようにしか見えなかった。

誰かのための化粧。誰かのための服装。きらびやかに着飾るのも、誰かのため。継ぎ接ぎだらけの絵を見ているような、奇妙な気持ちになった。それが、すべて相手の男のためにやっているのだと気づいたとき、蜻蛉切は幼なじみがもう幼なじみではなくなってしまったのだと思った。

そんな彼女が突然、部屋を訪れた。

裸足で。

やけに少ない荷物を持って。

サークル仲間から、彼女が相手の男と同棲を始めたというのを聞いていたし、就活もせずに男の部屋に入り浸っていると言う話も耳にしていた。卒業を機に結婚するかもしれない、と蜻蛉切は本気で思っていたのだ。

酒を飲みながら、ソファで寝てしまった彼女の顔に手を伸ばす。安らかな寝顔だった。しかし、顔にかかった髪を分ければ、赤く腫れた頬が露わになった。

近づくまで気づけなかった。そんな自分が、歯がゆい。

男に殴られて、彼女は逃げてきたのだ。

俺のもとに。

「何が、スイングバイだ」

蜻蛉切は、眉間にしわを寄せる。

彼女の言うスイングバイは、希望に満ちたものではなかった。心細い、たった一人の逃避行。誰

にも言えず、笑顔だけを振りまいてきた彼女の、最後の決心だった。

孤独に震える彼女を、このまま一人にさせはしない。

蜻蛉切は心に誓い、彼女の頭を撫でる。

——こちら、地球。こちら、地球。ニューホライズンズ、応答願います。

不意に、幼いころの記憶がよみがえる。

星が降るような夏の夜。果てない宇宙に自分の未来を重ねて、空に夢を描いていた。大人になった今、世界は思いのほか窮屈だ。空は変わらず広いのに、人は簡単に袋小路に追い込まれる。

トランシーバー一つで、俺の世界を変えた彼女も、今はこんな狭い場所にいる。

「決して、置いていきはしない」

蜻蛉切は、小さな体を抱き上げる。自分のベッドの上に寝かせ、そっと布団をかけた。

彼女の規則正しい寝息が、いつまでも蜻蛉切の

耳に残っていた。